

昭和 SPレコードで迎れば

靖國神社の歌

SPレコード収集家 ■ 城内 實

(一)

小泉首相が今年の八月十五日に靖国神社に参拝するとの決意を表明して以来、その日が近づくにつれて靖国参拝問題が新聞紙上をにぎわすようになつた。

しかし、中曾根首相以来十数年振りに現職の総理大臣が靖国神社に参拝しようがしまいが、ことさら大騒ぎすることではないと考へる。確かにこれまで日本国民の政治的意思の代表者たる総理大臣は、一部のマスコミや近隣諸国からの批判を恐れてか、靖国神社の「公式」参拝を避けて通つてきたきらいがある。それでも、二百四十六万余柱の英靈たちは現に存在し、この国は後を絶たない。

天皇皇后両陛下の御親拝が復活する呼び水となるならばそれはそれで結構なことであるが、世俗の代表たる総理大臣が仮に参拝しなかつたとしても、遺族や志のある若い世代が参拝し、その際に英靈たちが遺託したメッセージを素直に受け止めてくれさえすれば、それだけで英靈は満足しているはずである。

(二)

七月十四日の夕刻、身重の妻と一歳四ヶ月の息子を連れて靖国神社のみたま祭りに出かけた。

れではいけない空間のように考えていた。ところが、その後小堀桂一郎先生の「靖国神社と日本」、坪内祐三氏の「靖国」、所功氏編の「ようこそ靖国神社へ」といった書籍を繙くうちに、普段気軽に訪れても一向に差し支えない、そんなに敷居の高くないところであることが分かった。それ以来、折に触れて九段に行き、亡くなつた英靈たちに思いを馳せ、墮落しがちな自分に渴を入れることにしている。

(三)

靖国神社にまつわる歌謡曲は戦前数多く作られた。それらを一々紹介するには紙数が足りないので、ここでは数曲を挙げるにとどめる。

まず代表的なのは、昭和十五

年十二月に日本ビクターから発売された「奉頌歌—靖國神社の歌」であろう。このレコードは、大陸の戦争で戦争未亡人が急増していた時代に、雑誌「主婦之友」が主婦たちの鎮魂の祈りを捧げるために企画・制作したものである。同社の誇る徳山璉と四家文子が吹き込んでいる。歌詩は次のとおりである。

日の本の光に映えて
尽忠の雄魂祀る

宮柱 太く燐たり

ああ大君の ぬかづき給ふ
榮光の宮 靖國神社

日の御旗 断乎と守り
その命 國に捧げし

ますらおの 御魂鎮まる

ああ國民の 拜み稱ふ
いきおしの宮 靖國神社

幸御魂 幸わえまして
千木高く 輝くところ
皇國は永遠に 嚴たり
ああ一億の 畏み祈る
國護る宮 靖國神社

大沼哲の陸軍軍樂隊と内藤清五の海軍軍樂隊というライバル同士の合同演奏となつてゐるところが珍しい。

(四)

もう一つ「九段の母」という有名な歌がある。昨年のみたま祭りに小堀桂一郎先生と御一緒させて頂いた際、九十歳を越える現役歌手塩まさる氏がまさに彼の十八番の「九段の母」を歌つていた。大変感動的であった。「九段の母」は、昭和十四年四月の新譜で、国鉄出身歌手の塩まさるがキングからティチクに移籍して最初の曲であり、これがまた爆発的にヒットした。

空を衝くよな 大鳥居
斯んな立派な 御社に
神と祀られ 勿体なさよ
母は泣けます 嬉しさに

両掌合せて 跡き
拝むはずみの 御念仏

ハツと氣付いてうろたえました

倅許せよ 田舎者

鳶が鷹の子 生んだ様で
今じや果報が 身に余る
金鴉勲章が 見せたいばかり
逢いに来たぞや 九段坂

米国資本の二大レーベル日本ビクターや日本コロムビアとは違つて、ティチクは日本の庶民の素直な心情を歌にするのが得意なレコード会社であった。筆者はこの歌を最初に聴いた時に思わずほろりとなつた。「母は泣けます 嬉しさに」という逆説的な文句に、最愛の息子を失つた年老いた母親の悲しみが、見事にこめられている。

上野駅から 九段まで

勝手知らない 焦れつたさ

杖を頼りに 一日がかり

伴來たぞや 逢いに来た

「靖国の子へ」というものもありである。その一番の歌詩は次のとおりである。

父よ兄よ 靖國の
社へ送つた 子よ友よ
泣くな嘆くな 兵が
お国の為に 戰つて
華と散られた 勲は
萬世までも 香るのだ

「靖国の子へ」というものもありである。

(五)

軍事歌謡の大家である八巻明彦氏が言うように、この歌はいささか靖国の遺児たちに誇りと自覚を要求し過ぎるところがある。それに比べて「九段の母」の方が日本人の心の琴線に触れる名曲である。

すると、英靈が命を捨ててまで護ろうとしたものーそこに現在の日本社会が孕んでいる病巣を取り除くための鍵となるものが見えてくるような気がした。

英靈を大死にさせるようなことだけは断じて許されない。

(続く)

